

寺町散歩（6）東明山興福寺

史談会幹事 村崎春樹

東明山興福寺は、浄安寺と延命寺の間に位置し山門は寺町通りに面している。元和6年(1620)頃中国江西省浮梁県出身の劉覚が長崎に渡来して、当時肥前国彼杵郡長崎村伊良林郷であった現在地に小庵を結んだ。劉覚は僧ではなかったが後に真圓と称した。当時は、中国から来た中国人は全て唐人と云われていたので以後唐人とします。唐人の中には吉利支丹教徒もあり長崎奉行は長崎在住唐人への吉利支丹禁教令による取締りの徹底を行った。この為、唐人船主達は仏教徒であるの証明と航海安全を祈願を図る目的で仏殿と媽姐堂を現在地に建立して天后聖母(媽姐様)を祀り真圓を開基とした。その後長崎へ入港した唐船の船主及び乗組員は金品を寄進した。寛永9年(1632)には唐僧黙子如定が第2代住持として渡来、翌10年(1633)殿堂、山門、経蔵の建設に着手、同18年(1641)に完成したと『長崎市史地誌篇』は云う。それと時期を同じくして酒屋町と西古川町との間に長崎最初の石橋、眼鏡橋を架設した。正保元年(1644)唐僧逸然性融が渡来して第3代住持となった、逸然は近代漢画を日本に紹介した。更に逸然は、承応元年に我国の禅宗が正統性を失いつつあるのを憂い、当時高名で



あった中国黄檗山万福寺住持の隠元隆崎の渡来を頼川官兵衛、林仁兵衛、頼川藤左衛、渤海久兵衛、彭城太兵衛など十余名が招請した。四度目の招請により隠元禅師は渡来を決意、承応3年(1654)7月6日長崎へ上陸、興福寺に入山、長崎奉行黒川興兵衛及び甲斐庄喜右衛門は同日興福寺を訪ね敬意を表した。明暦元年(1655)には、興福寺の山号を東明山と名づけ隠元禅師は興福寺の開法開山と仰がれるようになった。その後、明暦元年(1655)江戸に参府して将軍へ謁見、京都の宇治に黄檗山万福寺を創建した。寛文3年(1663)3月筑後町から出火した火災により興福寺内の伽藍堂坊は悉く焼失した。第

4代住持澄一は再建に着手し、第5代住持悦峯の時に漸く竣工した。享保15年(1730)竺庵は第15代住持になったが同19年(1734)に黄檗山万福寺へ去った。竺庵の後継者たる唐僧がおらず以後和僧が住持となった。境内には大雄宝殿、媽姐堂、鐘鼓堂、三江会所門、山門、旧唐人

屋敷門、中島聖堂遺構大学門などがある。この内旧唐人屋敷門と中島聖堂遺構大学門は昭和34年(1959)から昭和35年(1960)にかけて興福寺に移築されたものです。山門は明暦元年に建設されたが寛文3年(1663)の大火にて焼失、元禄3年(1690)に再建されその後も度々修理されたものである。構造は木造本瓦葺単層入母屋造で『興福寺建物調』によると屋根流れ破風造り、軒二重垂木、組物出組、屋根本瓦葺、全部丹塗とある。山門表梁上には東明山の額がある。また山門裏面に隠元禅師筆による初登宝地の額がある。ただ『長崎市史地誌篇』には初登法地との記述がある。大雄宝殿(本堂)は寛永9年(1632)に第2代住持黙子如定が建立し、元禄2年(1689)に再建さらに明治16年(1883)に再建されたもので、木造本瓦葺重層切妻造、殿内は煉瓦敷きで、殿外層上正面に隠元禅師の筆になる大雄宝殿の大額がある。堂内には中央に釈迦如来、左に準提觀世音菩薩、右に地藏菩薩があり本堂の左側の壇に韋馱天が安置されている。また氷裂式組子の丸窓と瑠璃燈がある。媽姐堂は寛永9年黙子如定が創建、その後焼失、貞享3年(1686)から元禄2年(1689)にかけて再建。正面には天后聖母像及び脇侍両像あり、左壇に関帝、関平、周倉などを、右壇には大道公が祀つてある。天后聖母像の前の左右には千里眼と順風耳の像がある。鐘鼓楼は寛永9年(1632)創建、その後焼失、元禄4年(1691)に第3代悦峯が再建したもので屋根の鬼瓦は、内側には大黒天が用いられている。明治10年(1877)興福寺の玄関書院を取壊した木材を利用して中国三江出身の集会所として三江会所が建設されたが、原爆の被害にて現在は門のみが残っている。興福寺後山には唐人の墓地在り111基あり、年代は宝暦10年(1760)から明治4年(1871)までが判明している。



<追記>

前回の浄安寺の歴代住持名の不明であった部分が、浄安寺さんから追加情報がありましたので次の通り追記します。

十七代 貞源→高譽貞源 二十代 秀文→報譽秀文
二十六代 忍譽→忍譽秀考

